奉賛会講演集　第七輯

日本のこころ

上杉千郷

三重県護国神社奉賛会

三重県護国神社奉賛会主催
第七回公開講演会

日本のこころ

学校法人 皇學館 理事長
上杉千郷

平成十六年十月十六日
於 三重県護国神社参集殿

三重県護国神社

明治二年津藩主藤堂高猷公が、津八幡宮境内に小祠を建て、戊辰の役で戦死した藩士の霊を祀る『表忠社』が御創祀であり、以来国事国難に殉ぜられた三重県出身御英霊六万余柱の慰霊および安鎮と感謝の誠を捧げている。

明治七年官祭に列せられ、『官祭招魂社』となる。

同四十二年、現在地に移築遷座する。

昭和十四年、『三重県護国神社』と改称。

昭和天皇・皇太后両陛下には、同五十年十月二十七日行幸啓遊ばされ、御親拝を賜った。

平成元年に、御創祀百二十年・御遷座八十年・御社名改称五十年を迎えた。

毎年春季（四月二十一日・二十二日）

秋季（十月二十一日・二十二日）の例祭には、県内御遺族を始め奉賛会員・崇敬者等多数が参列している。

目次

講師略歴……1項

日本のこころ

学校法人 皇學館 理事長
上杉千郷

(一) はじめに……2項
(二) 学徒出陣の想い出……6項
(三) 神道の来世観……12項
(四) 宗教戦争の背景……19項
(五) 切支丹時代と国民性……28項
(六) 狛犬に見る国民性……36項

講師　上杉千郷先生　略歴

生年月日	大正12年４月３日	
本籍地	岐阜県	
学歴	昭和19年９月	神宮皇學館大學付属専門部卒業
	昭和25年３月	國學院大學文学部史学科卒業
	昭和14年７月	皇學館大學名誉博士の学位取得
職歴	昭和27年４月	総理府事務官
	昭和46年３月	全国神社会館館長
	昭和57年４月	長崎・鎮西大社諏訪神社宮司
	平成７年４月	世界連邦日本宗教委員会議長
	平成10年７月	長崎県神社庁長
	平成11年４月	世界宗教者平和会議日本委員会評議員
	平成13年８月	学校法人皇學館理事長
	平成15年10月	中国社会科学院日本研究所顧問 兼特邀研究員
賞罰	昭和50年６月	紺綬褒章受章
	平成７年12月	長崎新聞文化章受章
	平成14年５月	『狛犬事典』の研究成果に対し 神道文化会より表彰

日本のこころ

学校法人 皇學館　理事長　上杉千郷

(一) はじめに

皆さんこんにちは。身に余るご紹介を賜わり恐縮に存じます。今日は、貴重な会合の後の講師をとのこと、有難う存じます。実はどういう方々がお集まりになるかと思っておりましたが、お見受けするところ同じ世代の方々が多いようで少し気が楽になりました。その中に宇治土公名誉宮司さんのお姿が見えますが、宇治土公さんとは、戦争から

帰って以来長い間いろいろご指導を戴いており、特に同年代ということで仲良くさせて貰っている次第です。

それで、今日どういうことを申し上げたらいいかをいろいろ迷ったわけでございますが、私は本心では、ご紹介にもありましたように、私がライフワークとして研究しております狛犬の話をと思っておりました。しかし、大切な皆様方のこの会合の後のお話でございますので、やはり何かご参考になるような「日本のこころ」という題でお話申し上げたいと存じます。その日本のこころとは何かと言えば、私は率直に神道だと、神社神道こそ日本のこころであると、神道が分からなければ日本を理解することができないと申し上げます。実は、昨年も中国社会科学院というところで講演を頼まれました。そこは、中国政府直属の機関で、対日政策を立てる基本を立案するところです。実は、私は狛犬の話をしようと思ってスライドから何からたくさん用意して持っていきました。

ところが、それなりの興味は示されるわけですけれども、講演の中で神社が日本には八万社があるんだというような話をした所が、目をパッチリしてそんなにあるんですかという顔をされるわけです。そこで、神社の話を少ししますと、目が生き生きしてます。そこで、狛犬の話は端折りまして、あと皆さんが日本を理解しようと思ってらっしゃるならば、どうしても神道を勉強してくださいと、皆さんが日本のことについて基本的な政策を立案される方々ですから、神道を理解しなくては日本は語れませんと、神道の入り口の話を少し話しました。そうしましたら、狛犬の話についての評価よりも神道の話がよかったから、ぜひ今年も来て話をしてくれというようなことでございましたが、今年は学長に団長になって行ってもらって、まぁまた来年でも行きましょうと言っていた次第です。やはり日本を理解しようと思ったら、神道を理解しなきゃ駄目です。

今日はそういうことで、皆さんのお手元に教育勅語と狛犬の資料をおきましたけれど

も、私は神道を理解する上で若い人達に一番簡単に理解できるのは、教育勅語だと申します。そして、神道の心のわかるのは、大祓詞であると思っています。ですから大祓と教育勅語、これを理解してもらえれば、神道の入り口がわかりますよということをいつも申し上げているわけでございます。その中で、特に教育勅語というものが廃止をされて、教育の基本というものが壊れてしまいました。今、教育基本法を修正しようということでいろいろ論議されておりますけれども、この最初の原点に戻った論議でなければ、本当の日本の教育というものが元に戻らないんじゃないかということを思っておる次第です。

(二) 学徒出陣の想い出

実は、そのお話を申し上げる前に、私にとってこの三重県護国神社が、私が非常に親しくしていた大学の同級生である山本行昌君がここに祀られておるということによって、私にとっては格別の気持ちがあるわけでございます。私は先程ご紹介をいただきましたように、かつての神宮皇學館大學に学びました。そのときにわずかな四十名足らずの同級生の中で山本行昌君、彼は椿大神社の宮司家に育ちましたが、双子の兄弟で行昌君が兄貴で弟が先年亡くなった宮司さんなんですけれども、彼とは学生寮で隣の部屋同士で寝食を共にしました。竹を割ったような性格で、本当に仲良くしていたんですが、徴兵延期の制度が廃止されまして、学徒動員となり、我々と同じ昭和十八年十二月一日に一緒に学徒出陣、彼は南方戦線で戦死しています。

当時皇學館大學から全学で約百名程度の学徒出陣をいたしましたが、その中で二十二名戦死をいたしております。私どもの専門部からは五名の戦死者が出ております。今、思い出してみますと、当時海軍の予備学生という制度が施行され、飛行機の搭乗員を志す者が多く、その中で一級上の早川正雄さんという方は、目が近視で飛行機には無理だと言われておりました。彼は何としても搭乗員になりたい、海軍の予備学生を受けると言って、毎晩外へ出て星をながめて目の訓練をして、とうとう近視を治してしまいしました。それで、予備学生を志願、合格し、沖縄に特攻攻撃で戦死をいたしております。そのことを思い出しますと、あの当時の青年たちの意気込みというものがどんなにか深かったということがわかるわけです。

皇學館大学よりの学徒出陣で約二割の戦死者を出しておりますけれども、もう少し戦争が長引けば、当然我々も帰って来れなかった次第ですけれども、あの当時のことを思

い出し、この護国神社の社頭に立ってお参りをしておりますと、この生きながらえてきた私自身が、何か戦死された方々に対して申し訳ないという気持ちです。復員当時は、本当に自暴自棄の気持ちにもなったことを思い出します。この護国神社で、こうしてお参りできる立場になり、こういうお話を申し上げることができるということ、彼らに対する私の務めの一つでもあるんかなというふうに思っているわけでございます。私は、この今生きていること、このことが、大変不思議に思えると同時に、彼らに本当に申し訳ないという気持ちでいっぱいでございます。

私も海軍の予備生徒に合格し、この近くの香良洲の三重海軍航空隊に入り、そこより鈴鹿海軍航空隊で技術を学び、福山海軍航空隊で実用機で沖縄戦に参加いたしました。私の乗った飛行機は下駄履機と云われる水上機でした。どこでも離着水が、海の上ならできるわけですけれども、海上では出るときにはカタパルトで打ち出して貰い、帰って

くると海の上を巡洋艦が波を消して、そこへ降りて、クレーンで拾って貰うというような飛行機でした。私どもの飛行機は、フロートが付いておりますので、空中戦や爆撃には向かなくて、軍艦が大砲を撃つのを上からながめて弾着の観測をしたり、索敵をしたり、そういう仕事でありましたけれども、私たちにも特攻の指令が出ました。あるとき飛行長がやってきて、われわれ搭乗員の士官を整列させ、いよいよ戦局も厳しくなってきたから、特攻隊員を募集するから申し出よと紙一枚渡されて、熱望するものは「熱望」と書け、熱望ではないけれども気持ちのあるものは「望む」と書け、今出撃することについて行く気持ちのないものは「否」と書け、海軍にはいろいろな任務がある、決して一時の感情に走って志願することのないように、家庭の事情等もあろう、だから、絶対自分の気持ちを率直に書いて、自分の気持ちを隠すようなことをしてはいけないぞ、ということを懇々といわれ、夕方までにそれを出したわけですけれども、いよいよ夕

方、飛行長が全部受け取ってわれわれを並べて、全員「熱望」であったと、涙を流して私たちの手を握られた。それから、特攻訓練をしたわけですが、フロートが一つですからフロートをぶら下げる鉄の棒を曲げて、その下に二十五番といって二百五十キロの爆弾を一発ぶら下げて、フックで固定してしまいます。とれないように固定するのです。そして、左右の翼には、六番といって六十キロの爆弾を一発づつぶら下げます。更に二座機ですから操縦席と偵察席があるわけですが、偵察席の椅子をはずしてそこに六番を一発入れて、その上にクッションをのせてまたがるという爆装をしたわけです。どうしても、ぶつからなければ爆発しないというそういう特攻機であったわけでございますが、第一陣として椎根正中尉以下五機が出撃いたしました。

そのときの模様が、今もありありと目に浮かんでくるわけです。一機だけ不時着をしまして戻ってまいりましたけれども、四機は沖縄に出撃ができた。特攻攻撃をいたして

おるわけでございます。私たち無線室に集まって耳を逆立てて、出撃の彼らの様子を聞いておりました。敵機動部隊発見の「テ」の連送がありました。いよいよだなぁと思ったら、敵戦闘機に追撃されておるという報が入ってまいりました。そして、「ト」の連送といって「ト」を連続打つわけですが、突撃の「ト」ですが、最後にツーっという音が切れると突入という本当に今思い出しても、その情景がありありと浮かんでくるわけです。第二陣、第三陣出撃の準備をいたしましたが、終戦でそれも終わりになったわけです。彼らが出撃の前に私どもに送ってくれといって、何もそんな私物はありませんけれども、いろいろ書いた遺書等を預けてくれまして、それを送ってあげたところが、その姉さんたちから手紙もきておりました。そういう思い出を持って、この護国神社のご社頭にお参りするときに、彼等の願った日本になったのか、ほんとうにこう、申し訳ないという気持ち、このままでいいのかという気持ちでいっぱいでございます。

(三) 神道の来世観

神道では、来世というものを語りません。この世、この世を「うつしよ」と申しまして、「美しき世の中」としてこの世を最高に、自分たちの生ある限り更に死しても魂魄この世にとどまりこの世をよくする、そうして、文字通り美しき、すばらしい世にするんだと説くのです。これは仏教では、穢土（えど）といって、この世は汚い世の中であると来世というものを説きます。また、キリスト教がこの世は涙谷、涙の谷といいます。この世から来世というものに対する、天国というものを説くわけです。けれども、神道はそれを説きません。神道は、この世は美し世として、七度生まれてこの世に報国する、国に尽くすという楠木正成のこころというもの、これが神道の精神であり、自分の魂は次の志を継ぐ人に継いていくんだというのが神道のこころであります。この来世

を説かない、この世を最高に良くして、子孫に受け継いでいくんだと、その中に、魂が生きているんだという、そういう未来観というものを、神道では持っているわけでございます。

この神道の考え方というもの、これが今日の日本の繁栄というものを作った大きな力になっていると思いますが、その精神が教育勅語であろうと思っております。特に、教育勅語の中で説かれております真っ先に出てくる、「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ」という「孝」という言葉、これが皆さんに言うとびっくりされるんですけれども、英語にもフランス語にもドイツ語にも「孝」という言葉がないわけです。ヨーロッパ人には「孝」という概念がないわけです。「孝」という言葉を英語に訳せといっても訳せないわけです。これは、いよいよもう年賀状の売出しが来ましたけれども、「あけましておめでとう」「謹賀新年」という言葉。われわれの新年の気持ちですが、この「謹賀

新年」という言葉も英語にはありません。「ハッピーニューイヤー」というのは、「新しい年に幸あれかし」というだけで、「おめでとう」という言葉がないわけです。それで、ヨーロッパ人には特にこの「孝」という言葉、また、「謹賀新年」という新しい年を祝う言葉というものの概念がないということ、これが東洋人や日本人と西洋人の差というものがそこにあるというふうに思っております。教育勅語の中の「父母ニ孝ニ」という言葉これが神道の真髄だと思っております。この教育勅語が、皆様にお配りしておりますけれども、明治二十三年という年、これは日清戦争前の非常に国威の発揚する気持ちの国民全般が緊張しておる年であります。それでありますのに、明治天皇は教育勅語の中で、まず第一にわれわれの踏み行うべき道として、「父母ニ孝ニ」と孝行という言葉を最初に出されて、そうして「兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」と、最後に「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」とあります。普通でしたらですよ、あの時代の人たちの気

持ちであったら、まず「忠」にと、「忠」という言葉が真っ先に出てくるべきです。それを書かないで、「父母ニ孝ニ」という孝行というものを第一に述べられたということ、私はこれが神道の真髄として本当に明治陛下のお気持ちのあらわれと思うわけでございます。しかもですよ、この勅語というのには、これは教育勅語として勅語になっておりますけれども、御名御璽はありますが総理大臣以下の副署がないということ、これはふつうの法律等の勅語とは違っていて、明治天皇のお気持ち「私も拳々服膺して相共に行う」と述べられ、これは日本人としての道徳の眞髄だというふうな表現をしてらっしゃるということこれは大変なことであると思います。

と申しますのは、実は終戦後、教育の基本法をつくることになり、今日の教育基本法が出来るわけです。その教育基本法ができた翌年に、マッカーサーからの非常に強力な圧力によって衆議院においてこの教育勅語の排除の決議をいたします。参議院では失効

（•基本法S22・3・31成立　•排除・失効S23・6・19）の決議を行っております。これは、国会という所は法律を作るところであって、この教育勅語が総理大臣以下の副署がある法律であるならばよろしいですよ、しかしこれは法律じゃない。御名御璽だけで、天皇陛下のお名前のみで、総理大臣以下一人もここに副署がないのに、国会でこれをうんぬんすることは、非常に失礼なことです。権限がないわけです。ですから、私は国会議員の皆様に申し上げているんですが、教育勅語をああいう形で、議会で排除・失効の決議をしたことは、大変失礼しましたという謝罪の決議をするべきじゃないかと云っています。教育勅語は明治天皇がわれわれに対して一緒に踏み行おうという国民道徳をお示しになったものであるわけで、これは、法律ではないわけです。日本人の道徳であるわけです。ですから、私はこの問題について衆議院、参議院で決議されたことは、不満であり、そうして越権行為であるというふうに思っております。文部大臣であっ

た田中耕太郎もこの教育勅語が民主主義の時代にあっても、それは意義がなくなったということについては、私たち政府はそういうふうにはとっておりませんとはっきり言っておりますし、後の文部大臣の高橋誠一郎（昭和22年1月21日就任）も、この教育基本法との間に矛盾というものはないんだということを、言っております。それであるのに、昭和二十三年六月十九日に排除・失効の決議をしているわけです。ですから、これは国会として、占領軍の圧力によって行ったけれども、明治陛下に対して申し訳ない、謝りの決議をすべきじゃないかということを思っておるわけで、百歩譲っても、総理が国会で「占領下という特別の事態下においてなされたもので、今日ではあの決議は歴史的文書と理解している」との答弁をすべきと思っています。どうかその教育勅語の内容をひとつご覧いただいて、そういう世論というものを起こしていただければというふうに思っております。

実は、皇學館大学の中学校、高等学校では教育勅語を毛筆で全校生徒に書かせております。入学しますとまず、この教育勅語の話をして教育勅語を毛筆で書いて、それを表装して、明治神宮へ奉納しております。今年も私が生徒代表をつれて明治神宮へ奉納してまいります。これが、毎年の例になっております。明治神宮では、それを宝物館にずっと収蔵して下さっている由です。全国の中学校、高等学校でそういうことを教育勅語を毛書で書いて奉納する学校は、皇學館一校ですというふうに言ってもらっております。そういう点で皇學館大学、皇學館高校、中学校が、しつけ教育について大変ないい評価をいただいておることのひとつの原因でもありますし、生徒が大変しつけがいいといって皆さんから言われておる根源は、ここにあろうかと思っております。今でも中学生や、高等学校の生徒に教育勅語が言えるかといえばみんな諳じます。大学も寮生活をしておる学生は全部これを諳んずることができます。私は、皇學館教育の根本は教育勅

語にありというふうに確信をしておるわけでございます。この日本のわれわれのものの考え方、道徳の基本というものが教育勅語にあるということ、これはすばらしい思想と考え、これを外国にも理解してもらえるように進んでその活動をしていかなきゃならないと思っておるわけでございます。

(四) 宗教戦争の背景

今世界はご承知のように、イラクとかアフガニスタンとかでいろいろと戦争が行われております。殺戮が行われております。特に、イスラエル、パレスチナ人の衝突は根深いものがあるわけです。

イスラエルへ行ってみました。今の彼らの紛争というものは、われわれには容易に理

解できないことが非常に多い。しかし、考えてみてください。イスラエルでユダヤ人が言っておるのは、ユダヤ人は二千年昔までわれわれはこの神より賜ったイスラエルの土地にいたんだよと、それが、ローマ軍に追い出されて、世界各地に流浪の民族になってしまったんだ。しかし、二千年前までは、われわれの土地であったんだから、それはおれの土地なんだと、だからわれわれは今度、第二次世界大戦が終わった後、イギリス、アメリカの協力を得てここへ帰ってきたんだ。だから、正当なわれわれの土地に対する主張権があるんだとふうに言っておるわけです。パレスチナ人は、二千年後からわれわれはこの国を自分のものだとしてきたんですよと、だから当然われわれのものですよと言っておるんです。どちらが正しいですか。二千年前までおれの土地だった。二千年後からは私のものだと、これはひとごとのように思ってますけど、実は、アメリカではインディアンがわれわれの土地であったんだと、返せといっております。この間、私たち

の宗教者の会合がありましたときに、アイヌの人たちがこられまして、何とおっしゃったかと。百年前までは、北海道は、私たちの土地でしたよと、だから、北海道はアイヌに返してもらわなきゃ困ります。という話をされました。日本でもそういう論議ができるということ、いかに民族問題というものは根深いものがあるか、私たちの常識では解決したらいいじゃないかというふうな、そんなことを言っても、それが簡単に両民族が納得できるものではないということを思うわけです。特に、あのイスラエルという所、行ってみますと、もうほとんど砂漠地帯です。赤茶けた砂漠地帯です。そして、緑のあるところは川の両側とか、あるいはオアシスのあるところだけに緑がある。何も好んでここまで自分の父祖の地といっても帰ってくることもないんじゃないかと、もう世界各地で定着をして裕福な生活をしておった人たちもずいぶんいるわけです。それがなんでここまで帰ってきてこういう紛争をしなきゃならんかというふうにさえ思いますけれど

も、彼らにとってはユダヤ教という宗教に裏づけされた信念ですから、これはもう絶対にですねぇ理屈がどうのこうのいって通るもんじゃありません。この宗教に裏づけされた民族の信念というものは、大変なもんです。聞くところによりますと、ユダヤ人は子供を寝かしつけるときに、ユダヤ民族がこんなにみんなから迫害されたということをずっと語って聞かせるそうです。あのマサダの城塞ですか、あそこで何千人もローマ軍に滅ぼされるわけです。女、子供全部、一人残して全部、殺されるわけですけども、そのときの半年か、一年持ちこたえたいろいろな戦争の経過までこまごまと、子供が寝るときに語って聞かせるそうです。そして、私たちは何としても父祖の地であるユダヤのイスラエルの地に戻らなければならないということを語るそうです。そういうふうに心の底からそういう教育をされてしまえば、あの今のイスラエルの紛争というものがいかに根深いものかということが理解できると思うわけですが、あの一神教の人たちのもの

の考え方というもの、これは私たちの理解をはるかに超えたものです。自分の宗教以外の人たちは人間ではなくなるわけです。あの聖書にも、「エホバの神以外に犠牲を捧げる者があれば、殺せ」と書いてあるんです。これは、ドイツであの世界大戦のときに、ユダヤ人の虐殺をあんなに激しく行っております。キリスト教徒にとってはユダヤ教を信ずるユダヤ人は人間ではないわけです。一九三九年（昭和十四年）一月三十日、ドイツ帝国議会は、ユダヤ人種絶滅の宣言をしております。私もアウシュビッツへ行ったことがあります。あそこで、ガス室で何万人も殺したというところも見ました。ところが、あのアウシュビッツの収容所長アイヒマン親衛隊陸軍中佐は、どうなったかといいますと、彼が南米へ逃げるためのパスポートを出したのはローマ法王庁なのです。これは、ユダヤ人を虐殺したことは、人間を殺したことにならないからです。それは、イエスを十字架にかけたユダヤ人への当然の仕打ちとの考えなのです。彼らの信念からいけ

ば、その一神教というものが、もう絶対に、ほかの宗教を認めないというそういう考え方というものは、私たちの想像をはるかに超えたものです。ですから、私たちが簡単にすぐ妥協したらいいんじゃないかというようなそういう考え方は通じないのです。今そのために、我々世界の宗教者の人たちとその相手、違いを認め合うということこれが世界平和にとって一番大事なことじゃないかと、世界平和は相手の宗教の、自分以外の宗教をその存在を認め、違いを認め合うということ、これがなければ世界の平和はこないという話し合いをしております。それが今、世界の宗教者の平和会議で進められておりますけれども、原理主義の人たちにとっては、それはなかなか受け入れられないというのが現実でございます。それは、ほかにいろいろな理由等もありますけれども、唯一絶対には例外がないのです。基本的に自分の宗教以外は敵であると、敵であるどころじゃない人間じゃない。殺しても人間を殺したことにならないわけです。そこには、良心の

呵責というものが、何もないということを思いますと、日本人の神道のおおらかさ、神道の多様性は大変な貴重なものであるし、この神道の理念というものを、広く世界の人たちに理解してもらうようにわれわれは努力していかなきゃならないと、微力ながら行動をしている次第です。

おととしですが、インドネシアのバリ島で宗教者会議があっていきました。そこで演劇をやるというから見ないかということで見に行きました。舞台の上で獅子の姿をしたり、なんかいろんな格好をした人たちが、善の神と悪の神の対決の芝居なんです。日本だったら、善の神と悪の神と戦争したら、善の神が勝たないとわれわれは承知しないです。ところがですねぇ、皆さんもご覧になった方もおありかと思いますが、バリ島では、善の神と悪の神が交代で出て、部下を使い、本人も出てきたりして、決斗する。一時間ぐらい入れ代わり、立ち代わりやるんですが、どうでしょう。どちらが勝ったと思

いますか。おもしろいんです。どちらも勝たないんです。善の神と悪の神と戦争したんだけども、どちらも勝たない。両方引き分けして帰っていく。それで見物人皆、喜んで拍手するんです。考えて見ますと、そのヒンズー教の主神であるシヴァの神は、豊穣の神、豊作の神なんです。豊穣の神ではあるけれども、また破壊の神でもあるんです。洪水の、大水を出す神でもあるわけです。だから豊穣の神は、即洪水の神、建設の神は破壊の神なんだというそういう信仰のあり方というもの、これは日本でもあるわけです。神様には和御魂と荒御魂とある。伊勢神宮をお参りしますと、御正殿、内宮さんです。御正殿の裏には、荒祭宮が祀ってあります。これは、信仰のあり方として素直な、自然な考え方じゃないかと思うんです。われわれは、非常ににぎにぎしい、和の表現というものをもつ、そういう気持ちがあります。しかし、怒るという気持ちもあります。そういう性格をわれわれは持っております。両面もっているのです。非常に自然なものの考

え方だなぁというふうに思います。それでそれを見た後に、世界平和の宗教者会議がありました。私は皆さんに「今日ご覧になったインドネシアの劇をどうご覧になりましたか。善の神と悪の神が戦って、それが勝敗が決しない、善が勝ち、悪が勝ち、それを繰り返しながら、最終的には勝負がなく引き分けてしまうというこの考え方を我々も宗教の中に、考えることが大切でないか。今日世界の紛争の蔭に宗教が、かかわっていることが多い、これを参考にすべきではないか」という話をしましたら、皆さん深刻な顔をして、そうだなぁという顔をしておられました。ですから、神道の世界では誰しも和の気持ちがあり、和御魂を持ち、そして荒御魂をも持っている。そして、それがつり合ったときに、奇御魂となり不思議な働きをする。和御魂、荒御魂が調和されたときに不思議な奇御魂が発動されるということ、神道におけるすばらしい、信仰の中の表現であると思うわけです。宗教で、ひとつの面に偏ってしまって、信仰が違えば全部敵だという

ものの考え方、これが平和を乱すことになるわけです。

(五) 切支丹時代と国民性

私は実は先ほどちょっとご紹介いただきましたように長崎の鎮西大社諏訪神社、〝長崎くんち〟の神社、あそこに二十年間宮司としてご奉仕をしてまいりましたが、あの長崎の人たちは、皆さんですねぇキリスト教についての態度が非常にクールなんです。これは長崎の歴史よりくるものです。戦国時代にキリスト教が長崎に伝来してまいります。ザビエルたちが大分にきてから宣教師フロイスとかそういう人たちが長崎へきております。それで、地元の殿様、大村公たちは何としてもポルトガルとの貿易権とそれに鉄砲を欲しいわけです。ですから、彼らに擦り寄ってキリスト教に改宗することになります。

ところが、おもしろいのはキリスト教に洗礼を受けている初期には、伊勢の神宮の御師たちが大麻を持ってきますと、ちゃんと受けておるんです。それが、その宣教師たちから言われて、だんだんとやめてはいっておりますけれども、はじめはですねぇ、いかにキリスト教を受け入れるときの彼らの気持ちというものが、薄弱なものだったということが判ります。当初はキリストを信じたら、他の宗教は全て敵だ、仏教は敵だ、神社は敵だというような、そういう考え方はなかった。ただ、キリスト教がはいってくれば、すばらしい文化、鉄砲やいろいろの印刷技術などを持ってくる。文化の伝来者という気持ちで、そういうような気楽な気持ちで、洗礼を受けておるということがわかるわけです。大村の殿様などは、とにかく入信して、家族達全部が洗礼しておるのに、伊勢神宮のお札もちゃんとお受けしとるという。だから、精神的には非常に何といいますか気楽な入信の仕方をしております。ところが、そのうちに、宣教師からいろいろ言われて、

そんなことじゃいかんということで、だんだんと一神教というものに引っ張り込まれていくわけですが、そうしてなんとまぁ、大村候は長崎の土地を切支丹に寄付してしまうわけです。だから長崎の土地は、日本の土地でなくなるわけです。そうすると、長崎の領主になった切支丹の宣教師は、そこにある神社、仏閣を全て焼き払ってしまうわけです。そして、抵抗する者たちを殺してしまう。大村市に昊天宮という神社があります。そこの宮司さんの先祖は切支丹に攻め殺されています。そういう例が、たくさん出てきます。当時の史料を見てみますと、お寺の坊さんなども殺されたり、もうすごいことをされております。

あのフロイスという宣教師が、当時のことを日誌に細かく書いております。その頃仏教徒がいろいろあちこちから攻められるから、仏像とか経典を穴観音という山の上の洞穴の中に隠して拝んでいたところ、それを発見して「今日は目もくらむような高いがけ

の上をよじ登って、仏教徒がひそかに隠しおがんでいた仏像や経典を引っ張り出して、全部焼き放った」と書いておりますから、本当のことです。今でもその当時のいろいろな言い伝えが、残っております。島原のお寺に行きますと、お寺の裏山には、石の仏さんが沢山祀ってあります。ところがどうでしょう。その石の地蔵さんたち、ひとつも首がないんですよ。切支丹にみんな首が切られてしまっているのです。それを切支丹禁制後にお寺に祀ったものです。そういうことがあったので、今度は、いよいよ切支丹禁制になると、今度は切支丹を信仰している人たちに、大変気の毒な思いをされることになるわけです。ですから、ただ単に切支丹禁制で切支丹を圧迫したんだというようなことだけをみて、またそれしか教科書には書いてないんです。教科書をみてください。お寺や神社が焼き払われたとは、一行も書いてありません。みんな切支丹が圧迫されたんだと、弾圧されたとあります。

二十六聖人という記念碑があるのをご存知ですか。長崎駅の裏の山の上にあります。二十六人の聖人たちが張りつけになって殺された丘です。今日そこの丘に教会ができております。あの人たちがあそこで処刑されたと、十字架にかかったということ、十字架にかけるということを、日本人が今までの刑であったかということです。ああいう形で殺すということがあったかというと、ないんです。あれは、大阪、京都で捕まえられた信者たち、しかもその信者もですよ、皆さん知っている人はひとりもいないんです。ほとんど誰もその当時、知られていない無名の人ばかりなんです。その当時すでに、細川ガラシャであるとか、高山右近とか有名な切支丹の信者がいっぱいいたんです。ところが、そういう人たちを一人も捕まえないで、お互いにその当時は、フランシスコ派とザビエル派が争っていて、密告しあった者を捕まえたと云われています。で、二十六人を連れてきて、そして彼らは、処刑するならば、どうかはりつけにしてくれ、絶対に首を

切ったり、焼いたりはしないでくれと、そういうことを申し出るわけです。で、日本の役人たちは、まぁ君たちの考えるように希望するようにしてやろうということで行われた。はりつけにされれば天国に行けると信じられていた。焼殺されたら、天国へ行けないんです。フランスなんかで魔女狩りなんかして、絶対に十字架に架けないんです。あのジャンヌダルクも、みんな火で焼き殺すわけです。そうすると、天国へ行けないんです。ですから、天国へ行くためには、どうしてもキリストと同じはりつけにしてもらわないといかんわけですから、それを頼むと、日本の役人は知らないから、そうかと言って希望通りにはりつけにした。だから、彼らは全部天国へ行ったということです。しかもその遺体は払い下げて、遺品はゴアとかそういった所へ送っております。で、しかもですねぇ、キリストがはりつけにされた海の見えるああいう景色をほうふつとさせる丘を刑場とすることも、これは彼らからの依頼によってやっておるわけです。そのくらい

当時の日本人としてはキリスト教のことも知らないし、かえって日本へ行けば殉教できるということで、宣教師たちがどんどん密航してきたという事実もあるわけです。ですからその日本人が、キリスト教を弾圧したということについてですねぇ、あまりにも正しい報道がされておりません。しかもですよ、宣教師が密航してきて、捕まえられ、改宗、即ちキリスト教を捨てることをせまるわけですが、拷問に耐えかねて、キリスト教をすてますという宣教師がでるんです。それを、〝ころびバテレン〟というんですが、その、ころびバテレンは、日本人の女性を奥さんにしてやって、監獄の中で一生飼い殺しにしておるんです。そんな国は、ほかにありますか。

あの天正少年といって、大友藩とか各藩から四人の少年をローマ法王庁に派遣しましたことご存知の通りです。あの四人の中に、千々石ミゲルという少年がいました。彼らは、ローマ法王に会って、クリスチャンネームをもらい、いろいろ歓待を受けて帰って

くるんですが、日本へ帰ったら、千々石ミゲルだけは、仏教に転宗するんです。で、そのときに、彼はどうしてかというと、いろいろ調べてみると、どうもゴアで日本の女性が裸にされて、奴隷として売られていく状況を見て、キリスト教に疑問を感じて仏教にかわるというふうに言われております。ところが、キリスト教では黒い羊だというような表現で、非難をしておりますけれども、そういうふうにして、彼だけは一生を全うするわけです。他の者は海外へ追放されたり、処刑されたりして、後の三人は、一生を全うしないんですけれども、千々石ミゲルだけは、一生を全うしております。キリスト教を信仰したものを、棄教する。そのキリスト教を捨てるといっても、ふつうだったら、一回入信したら殺すということがヨーロッパでは当たり前なのに、それをしないで、なんとキリスト教をやめましたと言えば、宣教師でも日本人の女性を奥さんにしてやって、一生飼い殺しにするというような日本人の信仰に対する考え方というものが、非常

におおらかだということがいえるんじゃないでしょうか。私は、この点は本当にすばらしいことだというふうに思っております。まぁこんな話をしておりますとつきませんが、日本人の持っている信仰に対する多様性のこころというもの、これは大変平和であるということが言えると思います。これこそ神道の心であると申せましょう。長崎の人達はこれらのことは常識として理解しており、神社の氏子達も非常にクールにクリスチャン達とつき合っています。また、今日は長崎の宗教者仏教・キリスト教や立正佼成会など各宗が宗教者懇活会を結成して、他地区よりもより親密に交流し、世界平和の為に種々活動を行っております。これらは過去の歴史を教訓として未来に向って立ち上がったのです。

(六) 狛犬に見る国民性

そして最後に、私は皆さんに狛犬の話を少ししたいと思って狛犬のことについて簡単に書いたものをそこにお配りしております。私はこの狛犬のことについて、全国八万の神社どこの神社に行きましても狛犬の置いてない所はありません。狛犬というのは何かということ、これは古代オリエントのライオンを、日本がその姿とその精神的意義を取り入れて狛犬にしたわけです。で、狛犬は対になって、片方は口をあけ、片方の口を閉じている。これは、獅子狛犬といって獅子と狛犬と別の動物として扱っております。ところが、日本に来る前は皆ライオンの姿、韓国に行ってもそうだし、中国行っても同じ獅子が両方とも口をあけて片方には子供がおったり、玉を持ったりはしているけれども、同じ獅子です。ところが、それが日本に入ってきて、獅子狛犬という形になって、今は狛犬とのみ呼んでおりますけども、阿吽（ア・ウン）にして違う獣になっている。両方をよく見ると、姿が違っておるんです。片方は、獅子の方は、口をあけて、ふつうの獅子の格好

をしておるけれども、狛犬という方は角があるんです。違う動物にしてるんです。で、このことは、日本人は、その両方とも同じものを神前に置くというそういう気持ちは、左右対称だ、シンメトリというものは、日本人には精神的にそぐわないのです。これがおもしろいんです。皆さん神社へ行きますと、まぁ伊勢神宮なんかでもそうですが、微妙に左右対称ではないんです。日本人にはシンメトリというものを喜ばないんです。シンメトリ、左右対称だと日本人のこころは落ち着かないという、まぁこれはいろいろな問題をあげますと大変なんですが、そこで、片方は口をあけ、片方は口をとじた違う動物をつくり上げます。大きく変えないで、わずか違うんだけれども、左右対称にしないで左右不均等にするところに、日本人の美意識があるということです。それで、狛犬というものが成立するわけです。左右を対称にしない。この考え方というものが日本人の美意識、日本人の中に微妙に作用しているのです。

たとえば、伎楽という踊りが、奈良時代に大陸からはいってきます。今の正倉院なんかに伎楽面というのが残っております。その伎楽面。これはですねぇ、ぬいぐるみを着てリアルにおどけたりなんかして、音楽にあわせて踊ったりなんかするわけです。ところが、日本人というのは、それでそういうあんまりリアルなものは喜ばないんです。奈良時代を過ぎるとそれでプツっと無くなってしまう。そして、今度は、舞楽ができるし、田楽、神楽などいろいろなものになっていくわけです。それで面にしましても、はじめはぬいぐるみのようにして全部かぶるものだったけれども、だんだんと板一枚で全ての喜怒哀楽をあらわそうとするんです。それで踊り面というのができる。仮面といいますが、その踊り面がだんだん省略され、昇華されてくると、能面になるんです。だから、その前の田楽面と能面とどう変ってくるかというとみてください。能面をよくご覧ください。目が左右違うんです。ですから、能をみた折、自分を見つめられておるとい

うふうに思うような、そういう目の彫り方をしております。左右天地違う、それから能面の完成は、この左右の顔が微妙に変化しておる。そこに、能面が完成してくるわけです。やっと板一枚で、もうあごがガタガタするのでさえ、あの翁の面でさえ、もうそれのみにして、あとは板一枚でうつむくと顔をくもらす、あお向くとてらすといって喜びをあらわす。喜怒哀楽の全てを表現できる、そういう面を完成する。で、最初は「あうん」の型を表現したのです。

それで、「あうん」の能面も出来ました。ところが、「あ」の方は、口をあけているから自由にしゃべれるけれども、「うん」になると口が閉っているので、しゃべった声がこもってしまいます。だから、非常にゆっくり、面の周辺より出る音だけで、聞こえるようにすると、苦しい。「あうん」の能面を作ったけれども、初期だけでなくなってしまいます。口をあけただけで、その代わり左右の顔の造作を微妙に変えるという、こ

うして、今の能面が完成するのです。これは、日本人の気持ちというものは、シンメトリというもの、これは自然じゃないわけです。作ったものになります。日本人の気持ちというのは、やはり自然と一体だという神道のこころをつかまえたものでないと、日本人の芸能でも、いろんなものにも、建築においても、日本人の気持ちをとらえることができない。自然と一体のものをと、自然の形があらわれたものでないと日本人の心には定着しないという、これが日本のこころというものであろうというふうに思っております。どうかそういう点で、日本の芸術というものを、ひとつそれぞれの立場から見ていただきますと、神道のこころが入ったものでないと、日本の芸能にしても、美術にしても、建築にしても、全てにおいて日本人のこころを最終的につかまえたものにならないんだということがいえると思うわけです。

茶道にしましても、自然と一体の精神性、神道の心が見られます。例えば、茶室には

躙り口というものがあります。躙り口とはなにかと、あれは利休が考えたものなんですけども、あれはなぜあんな狭い所から出たり入ったりするか、頭をかがめて窮屈な姿で出たり入ったりします。あれをかんがえたこともわたしは神道の「魂のよみがえり」というそういうことからあの躙り口がつくられたんじゃないかなと思います。床の間においても、神祀る場所です。ですから全ての日本の芸術、日本の美というもの、これは、必ず神道がその根源にあることを認識をいただいて、そういう面から芸能にしても、芸術にしても、美術にしても、全てを見ていただきますとなるほどと納得できるものがあろうかと思います。

ちょうどいただきました時間となりましたので失礼いたしますけれども、なにか今日は年配の、我々同年輩の方々がたくさんいらっしゃるもんですから、つい甘えてこんな話になってしまいましたことをお詫び申し上げる次第でございます。どうも大変失礼い

たしました。（拍手）

◆参考　キリスト教とユダヤ教との関係については、上杉千年著『猶太難民と八紘一宇』（展転社）を一読下さい。

奉賛会講演集　第七輯
平成十七年六月十五日発行
発行者　三重県護国神社奉賛会
〒514-0006 津市広明町三八七番地
三重県護国神社内